

『小さなトロールと大きな洪水』

(ムーミン童話全集)

トーベ・ヤンソン 作・絵 富原真弓 訳
講談社 1992年

世界的大人気キャラクター「ムーミン」。日本でもテレビアニメ放送やグッズ等で知っている人が多いキャラクターの一つである。また、2018年のセンター試験問題ではムーミンが登場し、一躍話題となった。日本人の多くはキャラクターとしての「ムーミン」を知っているだろうが、児童書としての「ムーミン」を知っている人は少ないだろう。

「ムーミンシリーズ」の一連の物語ではムーミン谷での愉快的仲間たちとの生活や冒険等が書かれていることが多い。この『小さなトロールと大きな洪水』でも、ムーミンママとムーミントロールが行方不明のムーミンパパを探しながら、冬を越すために家を建てられるあたたかい場所を探しに行く。そしてその途中で出会った生き物たちと助け合う物語である。

このように「ムーミンシリーズ」では児童が読みやすい冒険や出会いがよく書かれている。しかし、「ムーミンシリーズ」の物語は「戦争」と深い関わりがあることを知っているだろうか。作者のトーベ・ヤンソンが『小さなトロールと大きな洪水』を書いたのは第二次世界大戦真っ最中である。

この作品では、ムーミントロールとムーミンママが冬を越すために家を建てられるあたたかい場所を探している。これは空襲によって家を失くし、新たな家を探す戦時中の人々の行動と似ている。また、この作品以外にも『ムーミン谷の彗星』では彗星が落ちてきて、地球が滅亡するかもしれないという物語となっている。これは日本の原爆を風刺しているとも言われている。

作者のトーベ・ヤンソンは戦争と似たような状況を物語に書いていた。それは作者の戦争への不安や恐怖を書いているのだろう。そして「ムーミンシリーズ」の物語は最終的にハッピーエンドで終わる。それは現実の戦争では暗く悲しいことが多かったが、物語の中だけでもハッピーエンドで終わらせたかったのだろう。

「ムーミン」と聞くと、かわいくて愉快的なキャラクターを思い浮かべるだろう。また、その児童書となると、楽しい冒険や出会いの物語を簡単にわかりやすくしている内容と思うかもしれない。しかし、作者が生き抜いた時代、キャラクターたちの行動や言葉を改めて考えると、大人になってから読むと深い意味が込められている物語であることに気づく。児童書は子どもが読むものという考えを捨て、大人でも楽しめる「ムーミンシリーズ」を読んでみることをお勧めする。

(本間 早春 国際日本文化学科4年次生)

書架から
書庫から

『大草原の小さな家』

ローラ・インガルス・ワイルダー 著
福音館書店 1972年

幼少期より読書が好きで分野を問わず読んでいたが、今でも好きな物語がある。ドラマ化もされた「大草原の小さな家」である。その前後の物語も翻訳本が多数出版されていて、当時小学生だった私は全て読み終えるまでに時間がかかったが、少しも飽きることがなかった。西部開拓時代のアメリカの暮らしがいかに大変なものであったか初めて知り、アメリカに興味を持つきっかけとなった本である。歴史的背景、独立記念日やインディアン（Native Americans に対する当時の呼称）との共生なども随所に描かれている。

ご存知の方も多いと思うが、この物語は今からおよそ150年前（日本でいうなら明治時代）、アメリカ西部で荒野を開拓しながら移住生活を送っていたワイルダー一家の話である。次女ローラの視点から描かれており、豊かな自然に囲まれて暮らす日々はのびのびとしているようでいて、しかし現代の生活からは想像できないほど厳しく苦しい時もあった

に違いないと想像するが、それを感じさせないほど一家の暮らしぶりがいきいきと細かく描写され、楽しさすら感じさせる。

移住の度に家を建て直し、荒れ地を畑にし、作物を育て、家畜を育てる。時にはバッタやムクドリの大群に襲われ作物を全て失い、猛吹雪や竜巻に巻き込まれることもある。全てが自然との共生、闘いの日々であった。

大草原にポツンと暮らしていたころは登場人物がほぼ一家のみであったが、町で暮らすようになってからは個性的な人々が多数登場し、物語が一層おもしろくなり、更に引き込まれた。隣人やクラスメート、教師との関わりの中で、ローラ達姉妹は勉学に励み、たくましく成長していく。常に物語の根底にあるのは家族や隣人への愛、自然の美しさと厳しさ、キリスト教への深い信仰心であった。実際の暮らしを多少アレンジした物語であるものの、ローラが経験したこと、感じたことは事実であり、今読み返してみても共感し、胸を打つものがある。

いつか一家が暮らした土地をめぐるみたい、とアメリカの地図を目にするたびに思っている。

(北村 暁子 本学管理運営部総務課主任)

書庫から
書架から